ネトゲの嫁が生徒会長だった件について
小説 story works
神楽陽子
挿絵 illustration works
はっとりまさき
立ち読み版

第一話　デートの相手が誰かさんだった件について　006
第二話　生徒会長とデスクワークの件について　048
第三話　生徒会長のおぱんちゅがヒラヒラな件について　106
第四話　新婚さんごっこでもスク水な件について　152
第五話　嫁が眼鏡と三つ編みだった件についてｋｗｓｋ　200
エピローグ　生徒会のあとは　250

# 登場人物紹介

Characters

## 桐生美奈（きりゅうみな）

生真面目で堅物な性格で、生徒会長も務めている少女。ネットゲーム“ノビノビ”上でユージと結婚した。ハンドルネームは「ミーナ」。幼少の頃から真一寺の剣道場で学んでいたため、勇司とはいくらか面識がある。

## 真一寺 勇司（まいちじ ゆうじ）

ネットゲームでのハンドルネームは「ユージ」。ゲーム内でミーナと“結婚”したが、その正体が憧れの桐生美奈と知ってしまい、戸惑うことになる。

肉棒の痺れがダイレクトに彼女へと伝わり、悩乱させる。ミーナはツインテールをかきあげるポーズで、汗だくの巨乳に湿った吐息をまとわりつかせた。
「すごいよ、ミーナ！　はあっ、オチンチンがびりびりって、さっきよりも！」
たった一回のピストンで脚が引き攣り、腰が抜けそうになる。結合部から食み出す肉唇が、フェラチオの舌技にも見えていやらしい。
だんだん粘膜襞の感触も鮮明になり、液たっぷりに絡みついてきた。濡れそぼった肉穴がオチンチンをしゃぶりながら、一緒に痺れついて過熱する。
「あぁん！　ダーリン、へあ、すごいの！　みーなのなかで、びくんびくんっへぇ！」
ミーナは悩ましい表情で唇をわななかせ、瞳に涙をたたえていた。決して痛がるものでも、嫌がるものでもなく、多感な恥ずかしさに打ちのめされてばかり。
「とまんないんだ、っはあ！　ミーナのオマ〇コ、うあぁ！　気持ちよすぎて！」
そんな恋人の耳たぶを舐めながら、勇司は息を荒らげて夢中になった。蒸れたスクール水着越しに互いの体温を擦り合わせ、同時に子作りの粘膜を混ぜ合わせる。
オナニーと違って「腰を使う」動きに慣れておらず、闇雲なピストンが精一杯だ。それでも回数をこなすうち、交尾らしくなってきた。
「ひあぁう！　だめ、ダーリン……みーあ、ぇひあ、エッチな声出ちゃう！」
コスプレ美女の色っぽい吐息が、少年の呼吸器官まで循環する。それほどの密着感を腕の中で感じ、恋人の温もり欲しさにどんどん昂ってしまう。

「僕もだよ、ミーナ！　はあっ、ガッコーなのに、ふう、こんな声で！」
場所が教室にもかかわらず、ふたりはマラソンばりに息を乱した。ミーナのうら若い肉体はとっくに汗だくで、押し揉めば、巨乳の柔らかさがてのひらにべとつく。
羽根つきでくねる腰つきも艶めかしく、劣情をそそった。スクール水着を撫でるたび、胸の高さで曲線が手に余ってしまう。
「ダーリン、あふぅ、さっきから、んあぁ！　おっぱい、ベタベタしすぎだよぉ！」
「だって、触りたくって……いいっ！　コレが気持ちいいんだ！」
背徳感に後ろを取られながら、少年は恋人の柔らかさに溺れた。たわわな乳果を我がものように揉みしだき、しこった突起をぴんっと弾く。
しかし勇司が「コレ」といったのは、ずぶ濡れのオマ〇コだ。
膣の狭さに締め付けられ、堪え性のない怒張が悦痺れを漲らせる。先端から熱せられて溶けるみたいに心地よい。
ぬちゅっぐちゃっ！　ぐちゃっ！　ぬちゃぬちゃっ！
出入り口では肉唇がサオを舐め、淫液を塗りたくった。摩擦で焼けつく剛直を潤わせ、拙いピストンをスムーズに導いてくれる。
「こんなのはじめてぇ、みーな、っはあん！　みーなのカラダ、ヘンになっへるの！　あそこもおっぱいも、ひあふぅ、んいっいい！」
恥ずかしがっているものだったミーナの反応も、喘ぎに快楽の意味を織り交ぜた。勇司

の情熱的な抜き挿しに色悶えつつ、側位から正常位へと姿勢を戻す。
「感じてるんだよね？　ミーナ、はあ、僕のオチンチンで！　もっと感じて！」
「やあんっ！　ダーリン、ひはっ、はげしいよお！　えあ、あむあぁ！」
おかげで腰をしっかり捕まえることができ、巨乳を存分に揺らしてやれた。翻弄されてばかりのミーナがしゃくりあげ、ピンク色のツインテールを振りまわす。
「へあああぁッ！　おくぅ、おくにあたってるぅ、ダーリンの……まほーのロッド！　あついのが、んぁあ、ファイアボルトされちゃうぅ！」
肉太のロッドは、魔法使いの女の子には扱いきれないらしい。腰を頻繁に捻るせいで、スクール水着の魔方陣も歪み、スキルを発動できずにいた。
悩ましげな魔法の修行に性的興奮を禁じえない。勇司の腰が大きくグラインドする。
「まだだよ？　ミーナ、僕のファイアボルトは……はあ、こ、これいいっ！」
剥き身のペニスは泳ぐように肉襞の波をくぐり、亀頭の痺れを子宮にぶつけた。
ぬかるんだ粘膜の卑猥な感触が、性的興奮を高め、男の子のピストンを躍起にする。勇司はミーナのスクール水着に涎まで垂れ、恋人とのマジカルセックスに溺れた。
生乳を搾るついでに彼女を机に押し付け、半ば無理強いしてしまう。
（もうオナニーなんてできないよ！　たまんない！）
頭の中が熱化し、貪ることしか考えられない。
机の上でアンバランスなミーナは、お行儀の悪い足つきで少年にしがみついた。汗だく

の太腿がダーリンをむっちりと挟み込む。
「だーりぃん！　らめ、だめなの、あぁん！　みーな、ダーリンの感じちゃう！」
こうでもしないと机ごとひっくり返ってしまうだろう。必然的に挿入も深まって、膣のきつい窄まりがピストンのたびに根元まで届いた。
「うっ？　ミーナ、っんはあ、僕もミーナの、感じまくってるよ！」
こちらが抜き挿ししているはずなのに、オマ〇コに食べられるかのように思える。
ずちゅちゅっ！　ぬちゃ、ぐちゃ！　ぐちゅぬちゃ！
牝穴はおねだり汁を垂れ、音まで立てて肉棒を咀嚼していた。勇司の性毛がびしょ濡れになるほど液の量が夥しく、玉袋まで熱い。
「あひぃい！　びりってきちゃ、んえぁ！　ダーリン、は、はげしすぎぃ！」
肉太を突き込むと、勇司の堪えきれない痺れがミーナにも伝わる。
（ミーナと！　ミーナと気持ちよく！）
快楽に比例して愛しさも込み上げた。ミーナに恋焦がれていることを、セックスでこそ実感する。彼女を欲するだけの野蛮な抜き挿しが止まらない。
「可愛いよ、ミーナっ、はあ、うぁあ！　エッチなカオ、もっと見せて！」
同時に「桐生美奈を貰いている」ことにも興奮し、彼女の顔から目が離せなかった。甘えん坊の魔法使いとなった生徒会長が、はしたない穴でチンポロッドを咥え込む。
「やだあ、ダーリン……あぁん！　すごい、どぉしてそんな、へはあっ、はげしくできる

の？　みーな、れあ、動けないのにぃ！」
ミーナは勇司の腰つきに見惚れ、小顔を赤らめながらもはにかんだ。緩んだ唇も笑みを浮かべ、玉の涎をぶらさげる。男の子の荒々しいセックスぶりに惚れたらしい。
「僕がしてあげるよ、っはあ！　オマ〇コにずぼって！」
「してえ？　もっと！　あはっぁ、おく、おくぅ！」
汗みずくの巨乳を揉みしだきつつ、勇司は淫猥な抜き挿しに耽った。
自分でも信じられないほど欲張って、乳果ばかりでなく、スクール水着の腰まわりまで撫でまわす。そのおへそに向け、中からオチンチンを突進させる。
「みーなっ、んあ、どうにか……あはぁあ！　もお、どーにかなっちゃうよおぉ！」
机に押し付けられ、求められる一方の可愛い恋人がおさげを波打たせた。少年の身体に脚でしがみつきながら、のけぞるように悶絶する。
魔法少女と呼ぶには成熟しすぎた肉体は、目に見えて痺れていた。紺色のスクール水着から白い巨乳を零し、右にも左にも転がす悩乱ぶりが、獣欲をそそってやまない。
「気持ちいい？　っはあ、ミーナも僕の！　気持ちいいんだよね、あぅく！」
熱量でさらに膨らみつつある肉棒が、ミーナの生殖穴で泳ぎまわった。
ずちゅちゅっ、ぱんっ！　ずちゃっ！　ぬちゃちゃ！
雁首でもっとも窮屈になる狭さが、亀頭を磨いてはサオを扱く。
結合部からは濁った発情汁が滲み、剛直もろとも膣粘膜を潤わせた。

「これいじょお、はぁん、されたら！　みーな、いひっ、びりびりっへぇ！」
ミーナは呂律もまわらない有様で、玉の涎がみっともない。眼鏡のない蕩けたまなざしで勇司だけを見詰め、灼けた喘ぎを放つ。
汗濡れの太腿も火照り、生乳など、揉むのが餅をつくみたいだ。スクール水着越しに肌を擦り合わせながら、中までチンポで攪拌してやるのは、ダーリンの義務。
「だめだ、出る……んはあっ、ミーナ、イクよ！　イクから脚、っうあぁあ！」
「みーなも！　ダーリン、えはぁ！　イっちゃう、せっくしゅでイっひゃうぅう！」
雁太の感度が最大まで高まり、秒読みの段階に入った。ところがミーナの脚が邪魔で、生殖器の結合を外すことができない。
性粘膜の温かさも名残惜しく、あと一回だけ、と抜き挿しを続行してしまう。
「ダーリン、れえっ、元気しゅぎぃ！　あばれまくっひぇるのぉ！」
豊満な肉体が弾む有様も病み付きになった。
おさげが彼女の首に巻きつくせいで、切ない喘ぎが必ず舌をもつれさせる。赤ちゃん言葉がかえって艶めかしい。
（出したい……ミーナに出しちゃいたくって！）
頭の中をミーナの存在感で満たされ、少年はくらくらになるまで酩酊した。中出しの罪悪感に後ろ髪を引かれつつも、ヒダヒダのいやらしさを諦めきれない。
「もうイきそうだ！　僕、み、ミーナのなかで！　ファイアボルト出ちゃうよ！」

「うんっ！　ダーリン、らして？　んふっは、みーなのしきゅうに、あへぇ、ふぁいあぼりゅと！　ぼ、ぼるとしまくってえ、れあぁあッ！」
喘ぎの回数を競いながら、ふたりは太さと狭さを交歓した。
煮え滾った粘膜穴を擦り、同時にこちらの怒張を擦ってもらう。摩擦の刺激は矢継ぎ早に快感となり、強い悦痺れに食らいつかれる。
愛蜜が泡となって弾けた。
ぱんっぱんっぱんっぱんっ！
勇司の下半身とミーナの太腿がぶつかる音かもしれない。
「ダーリン、いっしょに！　みーなとっ、あん、いっしょにきて？　へあぁん！」
ミーナが机の角に掴まり、スクール水着のウエストをくねらせる。
膣穴はさらに狭まり、オチンチンを苛烈に締め付けてくれた。液まみれの肉襞が甘えるみたいに群がってきて、少年の身も心も過熱させる。
「ほんとに出すよ！　ミーナのなかに、はあっ、うはあ！」
揺れ弾む巨乳にありったけの指を食い込ませ、勇司はペースを跳ね上げた。狭くなって感じられる膣圧を強引に突き破り、自身の疼きの先端を、子宮まで届かせる。
そこに体重が乗っかると、勢いがつきすぎてしまった。ミーナが舌も引っ込められない表情でいなないて、つぶらな瞳に悦を浮かべる。
「いいいっイク！　ダーリン、えれあ、みーなイクぅ！　だーりんのおちんひんれ、ぇへ

え、おま〇こ！　イっくよぉおおおぉぉおおおおお――――――！」
汗みずくの肉体が打ち震え、勇司の背中で爪先を引っ掛け合わせた。結合部でミーナの熱水が飛び散り、オチンチンを驚かせる。
「えっ？　あぁぁ出る！　せいえき、うあ、あああぁぁあああああああッ！」
俄かに膣が収斂し、サオと雁首と亀頭を続けざまに搾った。堰き止められていた高熱が漏れ、一気に放たれてしまう。
どびゅっ！　びゅっ、どびゅ！　びゅびゅっ、どびゅびゅ！
中出しファイアボルト。
狭苦しいオマ〇コの中で、永遠にも思える快美感が広がった。勇司のものだった体温がミーナの赤ちゃん部屋へと流れ込む。
「はああっ、あ、ああ……ミーナぁ……！」
ペニスの拍動は同時に膣の蠕動にも感じられた。罪悪感を引きずりつつ、中出し少年はスクール水着を引っ掴み、深い快楽に酔いしれる。
「れてるぅ、あはっ、ダーリンの……せええき、みーなの、えへ、らはれてるぅ」
恋人のミーナも恍惚として、涎まみれの唇に舌をのたくらせた。睫毛の掛かったまなざしで結合部に見惚れ、うっとりと微笑む。
スクール水着の格好で胸を出し、机の上でセックスなど、はしたない。
（ミーナと……美奈先輩と！）

それが生徒会長と思うと、優越感まで込み上げた。

一年生の間でも美人と評判の桐生美奈を、チンポで貫き、奪ってやったのである。しかも子宮にザーメンを散らかすまで。

「……はあっ！　はあ、ほんとに出しちゃったよ、ミーナの……オマ〇コに」

呼吸が整うまで、勇司はくにくにと巨乳の突起を弄っていた。

アクメで疲れ果てたらしいミーナは汗だくで、性感帯の反応が鈍い。

「ん、んもお、ダーリンったら。あふぁ、みーなのおっぱい、まだ触り足りないの？」

「そりゃもう、毎日揉みたいくらいで。柔らかくって、っふう、たまんないよ」

同様に勇司の身体も汗で蒸れ、彼女の吐息がまとわりつくように感じられた。ミーナの芳しさを堪能しつつ、勇司はそれを生徒会長のイメージに結びつける。

（美奈先輩のなかで出しちゃったぞ？　たくさん）

ミーナの脚が虚脱したことで、ようやくペニスを引き抜くことができた。花びらの内側からエラに続き、白濁汁が滲み出て、疚しい中出しを証明する。

疲労感は相当あるはずなのに、不思議と身体が重くはなかった。甘くて心地よい余韻が恋仲ならではのムードを長引かせる。

ミーナはもじもじと人差し指を捏ねくり合わせ、可愛い要求をしてきた。

「ダーリン？　みーな、お願いがあるんだけど……き、きちゅも……」

肝心なところで噛んでしまうのがいじらしい。恋人同士の証としてキスを忘れない、純

朴な恋愛願望が伝わってくる。
気丈な生徒会長が眼鏡で隠していた甘えん坊の素顔を、今まさに勇司だけが目の当たりにしているのだろう。そんな恋人のワガママにもっと振りまわされてみたくなった。
（ミーナとキスってことは、美奈先輩とキスってことに……）
彼女の唇を奪うべく、少年は胸を高鳴らせながら迫る。
「も、もちろんだよ。じゃあ――」
そのつもりが、前のめりになった拍子にバランスが崩れてしまった。
ふたり分の体重が机を傾け、まとめて倒す。
「きゃあああああっ!?」
ガッシャーン！
勇司は床でひっくり返り、恋人の下敷きとなった。
「あいってて。だ、大丈夫ですか？　美奈先輩」
「ええ、なんとか……ありがとう。助かったわ、真一寺君」
起き上がったミーナが眼鏡を整えるべく、こめかみのあたりでフレームを捜す。
けれども今は眼鏡を掛けていないわけで。
「……」
はっとして少年も顔を上げ、口を開きながらも沈黙した。
ミーナにはまだ実名を明かしていない。にもかかわらず、彼女は今しがた勇司を「真一

寺君」と苗字で呼んだのだ。
生徒会長に違わない彼女が青ざめ、裸の巨乳をスクール水着に雑に押し込む。
「ちちちっ、ちち！　違うのよ？　わ、私、じゃなくて！　みーな、今のはその！」
そして勇司から距離を取りつつ、横歩きで教室から逃げ出してしまう。
「みーな急ぐから、ねっ、今日はここまで。また明日……ううん、また今夜！　ゲームで会おうね、まっ、まいダーリン！」
置いてきぼりにされた少年は、パンツも穿かずに呆然とした。彼女の異様な慌てぶりに影響され、自分まで混乱してしまっているみたいだ。
「……マイダーリン？」
やがてチャイムが鳴り渡り、部活動もデートも終了の頃合となった。

ぬちゅ……ぬちゃ！　ちゅるっ！

ファーストキスだ。にもかかわらず、唇はどちらも吐息を駄々漏れにしながら、舌を熱烈に絡み合わせた。涎などお構いなしにキスを舐め尽くす。

お互いずっと前からこうしたかったみたいに。

「今はキス、ぷあっ、してるんだよ？　ミーナ、おちんちんはあとで」

「らめえ、ダーリン……んむっふ、みーな、スポンジなんらもん」

涎まみれのキスで溺れそうなのに、彼女の腰つきが止まらない。ミーナは素直に勇司に抱かれながら、お尻の谷間で自発的に、もしくは本能的にペニスを擦り続けてくれた。

ぬちゃちゃっ！　ぬちゅ、ぬちゅぬちゃ！

唇と股間で似たような音を立て、温かくなったソープ混じりにもつれあう。スクール水着越しであっても、肉体の熱さに自他の区別がつかない。

やがてキスは喘ぎに妨げられ、糸みたいな涎を何本も滴らせた。

「ぷはっ、はあ、ミーナのカラダ……気持ちいいぞ」

「ダーリンも、えあっむ、しゅごく美味しくって……ンッ、へあぁ」

口付けついでに首筋を舐めては、瞳を覗き込む距離で見詰めあう。性器でなくとも性欲じみた欲求があり、もっと擦りあっていたくなる。

もっとも擦れやすいオチンチンは肉厚のエラを張り、お尻の谷間を這い上がらん勢いで反りあがった。ミーナが太腿を閉じると、みっちりと締め付けられて心地よい。

「だめえ……これ、クセになっちゃいそお」
むしろ彼女のほうが男の子の雄々しさに焦がれているらしい。スクール水着の股間は太腿の付け根を合わせ、ペニスをくちゅくちゅと咀嚼した。
「そ、そろそろいいかな？　ミーナ」
気持ちが昂りすぎてしまって、一秒でも早く彼女を貫かないことには狂おしい。続きはベッドで、と拒まれたとしても、この場で押し倒すつもりだ。
ところがミーナは、我慢を言い聞かせるように勇司の胸を撫でつつ、身体を離した。
「じゃあとっておきの魔法、ダーリンにしてあげるね」
そしてセーラーリボンの下から、スクール水着の肩紐を引っ張り下ろす。
健康的で張りのある白さがふたつ、目の前で重たそうに揺れた。びしょ濡れの乳果実が艶やかに照り返り、男の子の目を釘付けにする。
「ダーリンのせいで、んはあ、おっぱいスキルがランクアップしちゃったんだから」
ピンク色の乳頭はしこり勃ち、見るからに疼きを蓄えていた。スクール水着という健全な幼さから溢れ出すアダルティックなふくよかさに、生唾物の劣情を禁じえない。
白いスクール水着の残った部分が、少年の前方を滑り落ちていく。
「まさかミーナ、そ、それって！」
「覚悟してね？　ダーリン。これがみーなの、ぱ・い・ず・りっ」
同じルートでたわわな巨乳も転がり、谷間でペニスをむにゅうと挟み込んだ。

進入は容易かった拡張感が、苛烈な締め付けに一変する。しかもパイズリは泡を立て、乳谷を充分すぎるくらい潤わせていた。
「すごいよ！　はあ、パイズリ……してもらうの、僕、夢だったんだ」
温かくて魅惑的な柔らかさが、興奮状態のオチンチンを直撃する。枕を折り曲げ、その隙間に挟み込まれるかのようなボリュームだ。
「こんなのが夢だったの？　もお、ダーリンのエッチ」
それがどれほど男性を昂らせる行為なのか、彼女には自覚が足りていない。初々しさが混じった挑発的な笑みを浮かべ、勇司の苦悶ぶりを観察する。
豊大な柔乳は、傾いた苗をまっすぐ植え替えるみたいに、肉茎を掴んだ。右と左で大玉となっている柔らかさを捏ね合わせながら、オチンチンを丹念に磨いてくれる。
「どーお？　ほらっ、みーなのぱいずり、ン、気持ちいいでしょ」
少年は息を荒らげ、のたうつように悶えた。
「うあ……っ！　おっぱいが、くうぅ、ヌルヌルって！」
乳圧のうねりがサオを扱くとともに、粘液じみたソープを雁首に絡みつかせる。揉む手つきの一回ごとに、ふくよかな感触へと沈められるみたいだ。
剥き出しとなって過熱する快楽神経が、感度をどんどん高めていく。
ずちゃっ！　ぬちゅ、ずちゃ！　ぬちゅぐちゃ！
ミーナは谷間を寄せ上げる動きで、ずぶ濡れの巨乳を押し揉んだ。スクール水着を引っ

掛けた特大の乳玉がふたつとも、男の子の股座に曲線を乗せ、むにむにと転がす。
「ダーリン、あはっ、たまんないってカオしてるぅ。おっぱい、好き？」
「す、好きだよ！　パイズリ、はあ、ほんと最高で！」
からかわれているとわかっていても、正直に白状するしかなかった。恋人の確信犯的な笑みにチンポを向け、甘い痺れに耐える。
ふたつの柔乳を交互に上下させることで、谷間は狭いなりに波打った。
強烈に搾られた拍子に、肉棒がカウパーをぴゅっと飛ばす。
「イっちゃうの？　ダーリン、んふふっ、みーなのぱいずりでイきそお？」
したり顔のミーナにオチンチンごと主導権を握られたが、抵抗どころではない。
彼女のおさげをすくって香りを嗅ぎ、独り占めするのが精一杯で。
「ほんとにイク、っはあ！　イっちゃうよ！」
びしょ濡れの全身は熱化し、間違いなく汗をかいていた。心臓が暴れまくり、呼吸は息継ぎそのものだ。股間で熱量が集束していくのを感じる。
そんな少年を追い込むべく、ミーナがより激しく柔乳を揉みしだいた。
「イっちゃえ、んあはっ！　ほらイっちゃえぇ、ダーリン！」
上半身が乳果をクッションにして弾むような動きで、ピストンの折り返しは必ず谷間を狭める。怒張に広げられながらも包み込む、太さと狭さの相性は抜群らしい。
しかも天辺の亀頭に、涎つきのキスが吸い付く。

「さっきのちゅづき、らよぉ？　んっむ……えあっれ、だーりんの、かはひゅぎっ」
「うわあぁあああっ？　もうダメ、ミーナ、ふぇ、フェラまでされたら！」
雁太をれろれろと舐めまわされるおかげで、股間で噴射の力がたわめられた。生温かい吐息の中で、舌で叩かれたり擦られたりするたび、快感が閃く。
痺れつくような刺激だけでなく、ミーナの唇を窄める顔つきも劣情をそそった。
（美奈先輩が僕のを美味しそうに！）
生徒会長のイメージを重ねられているとも知らず、ミーナが頬を膨らませつつ、ぬめる舌をのたくらせる。
フェラチオ奉仕に併せて、ふたつの柔らかな巨乳も勇司を挟み込んだ。
ずずずっ！　ぬちゅっ、ぬちゃぬちゃ！　ずちゅっ！
乳圧で扱き抜かれる先を舌で包まれ、頬が凹むたび、吸い付きが強烈に効く。
ミーナは小顔を赤らめながら、谷間の肉太を貪っていた。
「んぅちゅ、へあっ、ンッ！　ろお？　だーりん、へれぇおぉ」
大胆なパイズリと健気なフェラチオが、勇司の情欲を煽り立てる。
可愛がってやりたいけれど、犯してもやりたい――そんな疚しい興奮がオチンチンを膨張させた。生徒会長らしくもない涎だらけの唇に、真っ赤な亀頭を押し付けながら。
（ミーナとお風呂なんて、たまんないよ！）
無意識に腰を返し、彼女のパイズリを催促するみたいに揺らす。

よくできた恋人はリズミカルに柔乳を転がし、肉棒を磨いてくれた。
「もぉれそーなんでしょ？　あぷっ、イっふぇ？　だーりん、みーなのおっぱいれ」
ふくよかな胸の谷間を泡立てて、そこから飛び出す怒張にキスを重ねる。ソープでぬめ光る肉体の、もどかしそうな腰つきが艶めかしい。
亀頭の表面にあった悦痺れが、ペニスの芯を直撃した。
「おっぱいに出すよ！　ミーナ、うあっ、あああ！　はあああぁあああああッ！」
股間で膨張しきった生理的な熱量が、上に向かって解放される。
びゅるびゅるびゅる！　びゅるるっ、びゅる！
弾丸は乳圧を突破し、ばらまかれるように放たれた。
「きゃっ！　やぁん、ダーリンの……えぷっ、いっぱい出てるぅ……！」
ミーナが真正面でそれを浴び、びっくりしたように片目を伏せる。しかし一度始まってしまった噴射は止まらない。
びゅびゅっ！　びゅくびゅく！
煮えた汚濁は噴きつつ溢れ、ミーナの愛らしい顔で無数の精子を泳がせた。谷間を狭く寄せっ放しの双乳にもソープごと滴り落ち、勇司の熱いにおいを染み渡らせる。
少年は涎を垂れ、甘美な放精感に酔いしれた。
「パイズリ、メチャクチャ気持ちよくって……うあぁ、僕！」
こちらからも巨乳を掴み、恋人の唇に汚れたチンポを押し付ける。それは無理強いでは

なく、ミーナも自ら望んだことのように頬張り、残り汁をすすってくれた。
「んちゅう……っぷはあ！　どおだった？　ダーリン」
白濁の浮いた舌を見せ、得意そうに微笑む。
（そんなふうに舐められたら、また……！）
淫らな心地よさは腰が勝手にぞくぞくするほどで、頭の中まで悦びに満たされた。とば口を舌で穿られるせいで、射精の終わりを感覚できない。
「ミーナのフェラも、はあ、パイズリも……もうやめられそうにないよ？」
「えへへ、やめさせてあげないもんっ。ンッ、むぅぐ、れぉう」
ミーナはうっとりと瞳を細めながら、窄めた唇で雁首を刺激していた。残り汁をせがむようにも見えていやらしい。
おかげでオチンチンは勃起を維持し、まったく萎えそうにない。
エクスタシーは長い余韻となって残り、まだ頭がぼうっとしていた。バスルームに湯気が立ち込める、その熱のせいもあるだろう。
「ありがとう、ミーナ。すごく上手だったぞ」
結合を外すついでにミーナが、スクール水着の肩紐で巨乳のぬめりを剥がす。けれども粘っこい精液は簡単には拭えない。
「ダーリンのためなら、みーな、何でも頑張っちゃう。……ねっ？」
麓ほど丸みのついた生乳は、淫靡な潤沢を帯びていた。白色のスクール水着はほぼ完全

に透けるまでお湯を吸い、おへそにもぴったりと貼りついている。
「みーなも、えぇと、ごにょごにょ……いいでしょ？」
あられもない格好の恋人は、本命となる「続き」を待ち侘びている様子だった。
だが彼女の欲求を察しつつ、意地悪なダーリンはわざと押し倒すことをしない。浴室の床で仰向けに寝そべり、逆に待つ。
「どうしたいって？　ちゃんと言ってくれないと」
「そ、それはぁ……ダーリンので……」
おずおずとミーナは少年を跨ぎ、恥ずかしそうに肉棒を見下ろした。半脱ぎのスクール水着が股座にソープを集め、今のうちから入り口付近を潤わせる。
もどかしい手つきが、やっと股布を脇にのけた。
「……ダーリンの赤ちゃんで、ぁはあ、みーなのココ、ゴシゴシして欲しいの」
大胆な開脚のポーズにしては、恥じらって腰が引けているのが心にくい。スクール水着では考えられない風紀違反の行為に羞恥心を燃え上がらせているのだろう。
めり込んだ縦筋ともいえる秘裂が透明の雫をぶらさげる。
「赤ちゃんってオチンチンのことだね。やらしいなあ、ミーナは」
「だって、け、結婚の次は……そうなるんだもん」
ゲームではとっくに結婚している仲であり、マイホームも建てたのだから、次こそは子作りだった。スクール水着をぬめ光らせる肉体が、騎乗位寸前のポーズで踏ん張る。

（子作りごっこなら、中に出しちゃってもいい、ってことだよね？）

入り口はひしゃげるように綻び、粘膜のピンク色を覗かせた。前に一度だけ入ったことのある穴が、勇司の意欲を先端で漲らせる。

彼女の人差し指が肉唇をかきほぐすと、奥まった膣穴が少しだけ出てきた。全体がひくひくと疼き、小さい割に敏感そうなクリトリスを充血させる。

オチンチンを赤ん坊扱いするせいか、セックスはママゴトじみてきた。

「ママのなかキツくっても、んはあ、いい子にしててね？　ダーリンの赤ちゃん」

「わかんないぞ？　すごく暴れちゃうかも」

元気のよさが有り余っている肉棒が、尿道の残り汁を滲ませる。ガマン汁の濃さは精液とほとんど変わらない。

そのサオにミーナが手を添えつつ、ツインテールの中央で慎重に腰を下ろした。ソープのものではない粘液を涎みたいに滴らせる。

「ダーリンはじっとしてて？　……んうっふ、あぃ、いいいぃいいッ！」

パイズリで磨かれたおかげで滑りやすく、思いのほかスムーズに始まってしまった。

ずちゅずちゅずちゅ！

咄嗟に勇司がスクール水着のサイドを掴み、挿入の続きを強引に進める。

「はあああ！　これだよ、ミ、ミーナのオマ〇コ！」

「だめったらあ！　じっとしてっへ、あぁん、いったのにぃ！」

少年の欲求そのものに張り切っている怒張が、力ずくで秘裂をくぐり抜けた。狭苦しい膣口をこじ開け、ペニスの本体を捻り込む。

半分も入りきらないうちにミーナはしゃくりあげ、重たい裸乳を弾ませた。白い湯気とともに色香をまとい、熱っぽい喘ぎの回数を多くする。

「はいっちゃうぅ、ダーリンの、あふ！　へあぁあああああんっ！」

仰向けの勇司から押し込むのは限界があった。彼女の濡れそぼった粘膜襞が降りてくるのを待つしかなく、それはたった数秒のことなのに、いやに長く感じられる。

「もっとだよ、ミーナ！　くうぅう！」

焦るあまり少年はスクール水着を引っ張って、無理やりにでも侵入を果たした。

ずぶぶっ、ずぶずぶずぶ！

ミーナが勇司の下半身を踏みつけ、挑発でも誘惑でもない、はしたないだけのM字開脚を見せびらかす。騎乗位セックスのおかげで、こちらからは見上げるアングルだ。

「んふあぁあ……っ！　はいってるよぉ、ダーリンの……お、おちんちん！」

「ずっぽり入っちゃったね、はあ、ミーナのオマ〇コ、きつすぎ……！」

いきなり強く擦れすぎたのか、甘い痺れに食らいつかれた。けれども騎乗位で下敷きにされていては、腰を引くことができない。

勇司の上でミーナも同じく腰を震わせ、唇の両端を緩めていく。

「ダーリンのおちんちん……みーなのなかで、っあん、起きちゃったかも。びくびくって

してるの、えはぁ、わかるのぉ」
純な小顔は上気し、耳まで赤くなっていた。つぶらな瞳の瞬きがあどけなく、彼女のほうが年上のはずなのに、年下の女の子を乗せている気になる。
「ミーナのオマ〇コですごく出したがってるんだよ、ふうっ、僕のオチンチン」
犯しておきながら「守ってやりたい」と思ってしまう。
ミーナは手袋の端を噛み、深い結合に耐えていた。胸の谷間に溜まった精液混じりのソープを、びしょ濡れのスクール水着へと垂れ流す。
精液ならではの濁った白さが、ぬらぬらと照り返って艶めかしい。
付け根まで開かれた太腿もお湯で濡れ、湯船に浸かる必要なしに温もっていた。勇司の手が少し撫でるだけで、危なっかしいバランスのM字開脚が引き攣ってしまう。
「こんなオフロ……だめえ、みーな、ンッ、どぉにかなっちゃうよお」
オチンチン専用の窮屈なお風呂では、粘膜が滾るように熱く感じられた。エラ張りの勃起にねっとりと絡みつき、雁首の括れにも苛烈に吸い付く。
その感触を動かせないのがもどかしく、やり場のないむず痒さに苦悶させられた。
「ほらミーナ、はあ、ミーナが動いてくれないと」
「う、うん。みーな、頑張っちゃうんだから……へあっあああ！」
擦り合わせたい気持ちは同じだったのかもしれない。爪先とくるぶしでぎりぎりのバランスを保ちつつ、恋人が腰を揺すり始める。

トレードマークの赤い眼鏡が、涙ぐむ瞳をレンズに浮かせた。その唇が注意事項ついでに舌を出し、男の子のさきっちょに触れる。

「あああっ？　美奈先輩、いきなり……くっあうぅ！」

彼女と同じく緊張していたせいで、肉棒は感度が高くなりすぎていた。たまらず勇司は息を吐き、たどたどしい快感に胴震えを起こす。

生徒会長はカメラと目を合わそうとせず、雄々しい勃起に舌を這わせた。おしゃぶり好きなミーナだけのことはあり、皮を剥くのがとても上手。

「ガッコーでこんなに、ンッ、おっきくふぃて……もっろじちょお、なはひ？」

おもむろに頬張り、亀頭に熱い吐息をダイレクトに絡みつかせる。

ずっ、ずずず！　ずるるっ！

唇をきつく窄めるのは、猥音を漏らしたくないためだろう。

（これが美奈先輩のフェラ！　確かにミーナと同じかも）

会長らしさをイメージアップさせる眼鏡を掛けていても、表情は真っ赤な恥ずかしさで満たされていた。さっきまで端整な顔立ちだったのに、鼻の下を伸ばし、頬を凹ませる欲張りな吸い付きがいやらしい。

「こら、うごいひゃらめよ？　ぇぐっ、ッんぢゅ！」

口の中は唾液で濡れるほどに蒸れ、吐息と熱がこもっていた。中毒性のチンポ臭が鼻の奥まで届いているらしく、少し苦しそうに瞳を潤ませる。

「すごく気持ちいいです、美奈先輩のおくち……はあっ、い、いまの！」
勇司は爪先立ちで伸び上がり、ぞくぞくした。吸い付きのしぶとさと、円を描くような舌のうねり方は、紛れもなくミーナのものだ。
目を瞑ると、甘えん坊の彼女にしゃぶってもらっている錯覚がする。
「うぐぅ……ぷはっ、はしゃがないで、えあ、生徒会室なのよ？　れぇお」
ところが実際にチンポをしゃぶっているのは、生徒会長の桐生美奈であって。スクール水着をリボンで飾りつけた格好が、カメラに見つかるまいとお尻を引っ込める。
学院の風紀を取り締まるはずの彼女に、下の世話などをさせてしまう優越感は、少年の気を大きくした。
「でも美奈先輩、まだまだ……ミーナならもっと、はあ、チュパってしてくれますよ？」
もうひとりと比較してやると、美奈が可愛い嫉妬を燃やす。
「私だって、んあっへ、あの子くらいには……ひゃんと、れっ、れきるんひゃから」
どうやらミーナにライバル心を抱いているらしい。
亀頭を舌で弾きつつ、生徒会長の右手がサオを、左手が玉袋を掴んだ。手首のスナップを利かせて、精子が通るべきルートを揉むように圧迫する。
「こういうのも、っえあ、好きなんでしょ？」
小指を立てる手つきが奥ゆかしい。
シルクに似た感触のグローブは、適度に摩擦を生じ、勃起を巧みに昂らせた。廊下の足

音を気にしているくせに、口奉仕も疎かにしない。
おかげで肉棒は隆々といきり勃ち、亀頭を真っ赤に腫れ上がらせた。
「声が出ちゃいますよ、うはあっ、美奈先輩にしゃぶられてるってだけで」
これまで美奈に向けるに向けられなかった劣情に駆り立てられ、カメラ撮影にまったく遠慮がなくなってしまう。
スクール水着から溢れる蠱惑的な色香はもとより、生徒会長のフェラチオとテコキそのものに興奮しているようだった。
「もうビンビンじゃないの……んぁふっ、まいひじひゅんの、ばか」
いつも役員に対して命令口調の唇が、色っぽく意味深な吐息で勃起を挑発する。手つきはサオのシェイクが小刻みで、小指の先が弧を描くほど。
涎を塗りたくってから、改めて美奈は先端を頬張った。やはり猥音を漏らさないように唇を窄めつつ、吸い付きを雁首にフィットさせる。
「美奈先輩って、しゃぶるの好きすぎ……んはあ、ミーナっぽくなってきてますよ」
背徳感に後ろを取られながら、勇司は股間の温かさに耽溺した。
腰を引いても唇がすぐ追ってきて、淫猥な痺れから逃がしてもらえない。
「ぷあっはぁ、しかたないれしょ？　ミーナは、ンッ、わたひ……なんだもの」
撮影を拒絶していたはずの美奈は、いつしか満足そうに頬を膨らませつつ、カメラを見上げていた。耳まで真っ赤になろうと、破廉恥なおしゃぶりをやめない。

彼女にとってオチンチンは大好物なのだから。
ずちゅっ！　ぢゅる、ずずっず！　ぢゅるぢゅる！
涎まみれの舌は大円と小円の動きを作り、亀頭を念入りに磨いた。舌の動くぎりぎりの範囲で、エラが張り出て、余計に擦れやすくなってしまう。
併せて雁首の括れを執拗に吸引され、快感が無限に閃く。フェラチオされるのは初めてではないのに、腰の震えを少しも堪えられなかった。
「そっ、それ！　はあ、ぬるって動くの、めちゃくちゃ気持ちいいです！」
カメラを構える手がおぼつかなくなり、発作的に息を乱す。
眼鏡と三つ編みで優等生を気取った、生徒会長の唇は、リズミカルに肉棒を吸い上げてくれた。ミーナの時に憶えたテクニックだろう。
「こお？　まいひじくんの、あむぅ、弱いとこなんへ……おみろーし、なんはから」
眼鏡越しに男の子の苦悶ぶりを見上げながら、感度のよい部分を探し当て、れろれろと摩擦を集中させる。
赤腫れた怒張は丁寧に磨かれ、チンカスも残りそうになかった。
（あの美奈先輩が僕のを！）
誰もが知る生徒会長が、誰にも内緒でペニスを頬張り、味わっている。
スクール水着を正しく着るべき立場にもかかわらず、放課後の生徒会室で、男の子の股座に向かって跪いているのだ。眼鏡に掛かりそうな前髪をかきあげつつ、勇司の雄々しい

肉棒を素直に味わってばかり。
「美味しいですか？　はあっ、僕のオチンチン」
それを自分だけが目にしている事実が、野蛮な興奮を燃え上がらせた。
彼女のお尻が後ろに下がりすぎたせいで、またドアをがたっと揺らしてしまう。
「……っんぷは！　ち、ちょっと……真一寺君も静かにして」
美奈は眼鏡とともに振り返り、ドア越しでは読み切れない人気を警戒した。
各クラブは本格的に活動を始めたようで、廊下に人影はない。それでも慎重にならざるを得ない緊迫感が、生徒会室の秘め事をより不謹慎なものに感じさせる。
口奉仕は中断され、快感の来ない亀頭が無性にむず痒くなってきた。先端からねっとりと垂れる、生温かい涎が名残惜しい。
「誰もいませんって。大丈夫ですよ、美奈先輩……それよりはやく」
たった数秒の我慢も続かず、注文してしまう。
「生徒会でもそれくらい熱心に意見してくれればいいのに。一年C組の委員君？」
男の子が煩悶とする理由を知りながら、美奈は再び唇を開けてはくれなかった。さっきよりは勝気になって勇司を見詰め、してやったりと微笑む。
小指の立て方が上品な右手が、涎を絡めつつサオを扱いた。手袋を嵌めているからこそ排泄器官に容赦がなく、左手のほうは中指で肛門をくにくにと弄り出す。
「ほぅら、やっぱり手でも出せるんでしょう？」

「うあああっ！　これもすごいです、美奈先輩、や、優しく！」
グラスでも品定めするかのような手つきが、オチンチンを這い上がった。尻穴への奇襲がいつ知れずとありそうで、股間一帯に期待を孕んだ緊張感が走る。
布製のグローブは唾液でべとつき、握る力を粘膜的な締め付けにした。涎の糸をほぐすため、数回ごとに指がばらけ、勃起をくすぐりまわす。
「優しくって、こうかしら？　んはぁ、委員君の、すごいニオイ……」
おまけに手袋のおかげで、指の股まで擦れた。
ぬちゃぬちゃ！　ねちゃっ、ぬちゅ！
人差し指と中指、中指と薬指、人差し指と薬指、と挟み方が不規則に変わる。
男性の自慰であれば力ずくで扱くところだが、美奈の手遊びはぎりぎりのもどかしさを保った。裏筋を圧迫していた親指がわずかに浮き、脈拍を読む。
当然ダーリンとして、やられっ放しではいられなかった。
「僕のチンポ、もっかいぱっくんって、はあ、してもいいんですよ？　美奈先輩」
カメラを真下に向けて囁きながら、三つ編みの髪を撫でてやる。
「む、無理よ。また誰か通るかもしれないもの」
生徒会長はドアから少しお尻を離し、できるだけ音を立てまいとした。咥えようとする素振りはあるものの、寸前で舌を引っ込め、タイミングを待つところからやりなおす。
一方でオチンチンは準備万端に反りあがっていた。勃起させているだけでも体力を消耗

するほどで、言葉が途切れがちになる。
「そんなカッコ、はあ、み、見つかったら大変ですもんね」
「だったら、今じゃなくったって……いいでしょう？」
ちょっとした意地悪もムードを盛り上げた。お互いフェラチオの続きを意識しているからこそ、勇司の視線は催促に、美奈の視線は従順になる。
だんだんテコキもまどろっこしく感じられ、苦悶させられた。
「しかたないわね、んもお……っおぐぅ、らひゅときは、ン、いーなはい？」
やっと雁太を頬張ってもらえると、快感の脊髄反射で腰がびくんと跳ねてしまう。
待ち侘びていたマウスピストンがサオの半ばまで届いた。美奈がスクール水着のスタイルを波打たせることで、巧みにリズムをつける。
ハンドシェイクも織り交ぜられ、肉棒の痺れはどんどん過熱していった。
「はああっ……美奈先輩のおくちのなか、うあぁ！　最高です！」
「そんなにきもひ、あむっ、いいの？　ろおひたのよ……いちゅもより、っんうぐ」
勇司が以前にも増して昂る理由を、おそらく彼女は理解できていない。
甘えん坊のミーナなら咥えてくれて当然だが、この放課後、勇司の股座で素直にチンポを咥えているのは、生徒会長の桐生美奈なのだ。
（美味しそうなカオしちゃって、美奈先輩ってば！）
しかも眼鏡つきの表情がやや強張っていようと、フェラのテクニックは本物で。

皆から慕われている生徒会長に、下の世話などを教え込んでしまったことは罪深く、同時に秘密の優越感をもたらした。

ぢゅっちゅぷ！　ちゅぱっ！　ずちゅぱ！

唾液の量が多くなるにつれ、吸い音も破廉恥なものになってくる。

「だひゅなら、はやくひなさぃ？　えぉろっ、それへきょおは、おひまいに」

美奈にとっては早く終わらせてしまいたいらしい。上目遣いで赤面しつつ、撮影覚悟でペニスを頬張り、感じやすいさきっちょを集中的に刺激する。

舌が大円の軌道でうねるたび、腰が抜けそうになった。果てるまでもはや時間の問題であって、そう遠くはない。

「だめですよ。始まったばかりなのに、はあっ、終わりなんて」

にもかかわらず、勇司はフェラチオの加速を制し、あえて肉棒を引きずり抜いた。

生徒会長のコスプレ姿を堪能しないことには、終われるはずがない。カメラを一旦机に置いて、スクール水着に手を伸ばす。

「こらっ、真一寺君？　待ちなさいったら、こういうのは」

「これからが本番じゃないですか、美奈先輩。荷物はこっちに下ろしますよ」

起き上がったところで逃げ場のない美奈は、少年に促され、おずおずと歩んだ。躊躇はしても拒絶することはなく、会長専用の机に、お尻でよじ登るように座ってくれる。

（カラダはミーナなのに、ほんとに美奈先輩なんだ）

机に腰掛けるなど行儀が悪いはずなのに、たおやかな身のこなしのせいか容姿端麗だ。スカートがない代わりに、三つ編みをスクール水着のウエストに巻きつける。
「最後まではさせてあげないわよ？　って、聞きなさ……んふぅう！」
息遣いが聴こえる近さで、勇司は生徒会長の無防備すぎるボディラインを撫でた。
ふくよかな胸の膨らみをふたつとも押し掴んだら、乳角の位置を薄生地ごと舐め、つい欲張って吸い上げてしまう。
「あむうっ、美奈せんぱひの、ミーナのと同じくらいおいしいれす」
柔肌の香りが男の子を本能的に酔わせた。ゲームの恋人で練習した通りに、突起に舌を巻いたり、弾いたりして、快感を与えてやる。
「あぁん！　だめったら、真一寺君？　誰もいいなんて言って……ン、えはぁあ！」
生徒会長の顔つきがみるみる切なくなり、眼鏡のレンズに色っぽい瞳が浮かんだ。一年C組の委員君を引き剥がすつもりだったらしい手で、逆にしがみついてくる。
吐息も艶めかしい色を帯び、芳しいにおいをムンムンに漂わせた。
「おっきなおっぱいですよね、ほんと。僕って贅沢者かも、んっうぅぐ」
たわわな乳果は指が十本とも食い込むほど大きく、柔らかい。薄生地が張っているせいか、膨らみすぎた風船をふたつ、持ち比べするみたいだ。
吸われることを目的とした突起が、口の中でぴくぴくと疼く。
「こんなカッコで、んむっう、ガッコーのプールに入ってるなんて……やらしいなあ」

「だ、だってこれは、学院指定で……あんっ、や、やらしくなんか」
言い訳には説得力がなかった。模範的であるべき生徒会長にもかかわらず、身体つきの風紀違反じみたエロティシズムに自覚が足りていないらしい。
羽根飾りを乗せた太腿がスクール水着の股布を狭め、男の子の視線を誘う。
「水着姿で僕を待ってた時点で、こうするつもりだったんですよね？　美奈先輩」
勇司は勢い任せに彼女の細腕をのけ、巨乳の下へと頭を潜り込ませた。スクール水着に頬擦りしては、おへその縦筋を舌でなぞり下ろす。
「ぺろぺろしないでったら、んふぁ、真一寺君……お願い、先に髪を替えさせて？　こういうコトはミーナになってないと」
美奈は顔を赤らめ、眼鏡の中を潤ませた。
カラダの擦りあいっこは、ミーナでなくては受け入れられないようだ。しかし少年は構わずスクール水着を舐めまわし、閉じたがる太腿を押し広げる。
「美奈先輩のままでいてくださいよ。僕、生徒会長のココに興味あるんです」
「こら、もうおしまいに……やだっ、嗅いだりしないで！」
生徒会長の肉体は股布を蒸らすくらい火照っていた。太腿の間に頭を挟み込むと、甘いにおいが生温かく、濃厚になる。
裸の太腿はしっとりと汗で濡れ、張りのある柔肌が光沢さえ放った。
スクール水着の股布をねぶりあげると、彼女の両脚が伸びきることも、曲がりきること

もなく引き攣ってしまう。
「あとでっ、ミーナになったら何でもさせてあげるから……んふぅう？」
自ら巨乳をかき抱くポーズのまま、恋人は唇を噛んでいた。いやいやとかぶりを振る抵抗の仕草が、かえって男の子をつけ上がらせてしまうことを、理解していない。
「ぷはぁ、美奈先輩の、くっきりしてきましたよ」
勇司の涎が多くなってきたスクール水着の、本来なら秘匿されるべきところに、女の子の縦筋が浮かび上がった。股布は内側からもじわりと滲む。
濡れており、また濡らしているのは間違いない。
（美奈先輩も期待しちゃってるんだ？）
放課後の生徒会室にあってはならないムードが立ち込めた。スクール水着を可愛いリボンで飾りつけた生徒会長が、汗ばんだ太腿で少年の顔を挟み込む。
「もういいでしょ？　えはぁ、私にはミーナと違って、生徒会長って立場が」
勇司は曲線のついた太腿をさすりつつ、股間に意味深な吐息を充満させてやった。それから流麗なボディラインをよじ登り、耳打ちする。
「早く終わって欲しいんですね。じゃあ最後に……ごにょごにょ」
囁きの内容に美奈が困惑し、眼鏡の内側で視線を逃がした。
「……そんなことを、こ、ここでしてって？　……カメラだってまわってるのよ？」
生徒会長らしくもなく人差し指を突っつき合わせ、まごまごするばかり。許容したわけ

ではない撮影会に困り果て、今日は締まらない眉を八の字に傾ける。
「それを見せてくれたら、ミーナになっていいですから」
密かに胸を高鳴らせながら、少年は改めてカメラを手に取った。生徒会長のマニアックな水着姿を捉え、カメラアピールを待つ。
指示通りにしてくれない限り撮影をやめない、不動の構えで。
「ほらほら、美奈先輩。こっち向いてください」
「ち、調子に乗らないで？　ミーナにならともかく、私にそんな偉そうに……」
年下の男の子に遊ばれていては我慢ならないらしいお姉さんは、こわごわと最小限に太腿を開いた。おぼつかない手つきでスクール水着を撫で下ろし、股布に指を差し込む。
そして二秒、やっぱり五秒と決めあぐねた末、慎重に薄生地をのける。
「うぅ……問題行為よ、こんなの……！」
さしもの気丈な生徒会長も眼鏡越しに涙ぐみ、ぽっと赤面した。それでもスクール水着の正面をカメラに向け、股間の濡れ具合を見せびらかす。
清らかなピンク色のクレバスが綻び、肉唇がまろび出てきた。コスプレのため入念に剃毛されており、撮影を妨げるものがない。
膣前庭のさらに内側で奥まっている秘口を、カメラが発見する。
（生徒会長のオマ〇コ見れちゃうの、僕だけなんだ）
ほかの誰も見ることない勇司専用の入り口は、淫靡な液でぬらついていた。もしかする

と学院の男子らがオカズにしているかもしれない、肉感的なプロポーションが、スクール水着に色っぽい吐息を落とす。
「美奈先輩、次はどうするんでしたっけ？」
「わ、わかってるわよ、ばか……これでいいんでしょう？」
涙目のうえ、耳まで真っ赤になりながら、美奈が両手でチョキを作った。しかし人差し指も中指も曲がって、媚び上手なコスプレとは裏腹にダブルピースが決まらない。
（美奈先輩がこんなカッコでピース！　ガマンなんてしてらんないよ！）
生徒会長の恥ずかしい有様を撮影しつつ、勇司は肉棒を近づけた。フェラチオの唾液は半乾きになっており、亀頭が強迫的なほど欲求不満を募らせる。
「まさかっ？　待ちなさいってば、真一寺君！　ピースならしてるじゃないの！」
その意図を察したらしい美奈が狼狽し、下手くそなピースを見せ付けた。必死なカメラアピールで許しを乞う。
「無理ですよ、僕……今すぐ美奈先輩とエッチしたくって！」
けれどもオチンチンは構わず前進し、疚しい形のさきっちょで肉唇を押しのけた。そのタイミングで彼女の携帯電話が鳴り出して、勇司と美奈をぎくりと強張らせる。
（っうわ！　で、電話か……）
電話が鳴っているだけで、第三者に聞き耳を立てられているわけではない。それでも誰にも知られてはならないセックスのため、ふたりは野暮な電話が沈黙するまで待った。

REC

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
**株式会社キルタイムコミュニケーション**
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

**http://ktcom.jp/**

竹内けん

Takeuti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし
イラストも多数収録!

Now On Sale!!

A5判／定価990円(税込)

KTC 特設サイトはこちらからアクセス!! http://ktcom.jp/harem/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

# あなたはどのタイプ？

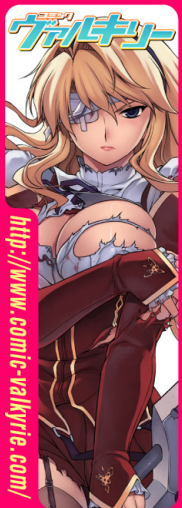
詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

## http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!




KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁でではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!